国語科における授業と評価（1）

― 「情報を読む力」に培う授業の実践を通して ―

三 宅 将 巳 ・ 杉 野 清 隆 ・ 山 元 隆 春*

Japanese Class in Junior High School and Evaluation

-Through the chapter bringing up Students' ability for reading text-

Masami MIYAKE, Kiyotaka SUGINO, and Takaharu YAMAMOTO

Abstract. The purpose of this research is to study the creation of Japanese language teaching bringing up students' zest for reading text, and to study how we evaluate students' learning. Especially, we study how we should evaluate students according to the National Curriculum Standards, and how we should use the evaluation in teaching how to read text. In this paper, we describe how we evaluate the ninth grade students' learning, and how we teach the seventh grade students and evaluate their learning.

Key words : evaluation, text, ability of reading

Ⅰ．はじめに

本年度，新学習指導要領に基づく教育課程がスタートした。「教育内容の削減」「完全週五日制」への移行など，大きな変化の中で「評価」についても目標に準拠した「絶対評価」が求められている。国語科において，評価のあり方はどうあるべきなのか。「確かな学力」を身につけさせるべく，どのように評価を考え実践していくかが，重要な課題として突きつけられている。

本校国語科では，昨年度，国語科における「基礎・基本」として「情報化社会を主体的に生きていくための力」を重視し，特に「情報を読む力」に培う授業の創造に取り組んだ。そのような力をどう評価していくかについても今後研究していく必要がある。本研究は，新しい教育課程における「評価」のあり方及び授業実践について考察することを目的とする。

Ⅱ．学習指導要領「話す・聞く」「書く」「読む」領域の内容と「情報を読む力」

「情報を読む力」とは，「情報の内容」をとらえるのみでなく，「情報の個性」をとらえ，その情報を主体的に評価する力であり，本校国語科はその力の育成を目指している。学習指導要領の「話す・聞く」「書く」「読む」領域の内容と「情報を読む力」の関わりを示したのが表１である。

＊広島大学大学院教育学研究科助教授

表１　学習指導要領の領域と「情報を読む力」

「読む・聞く」	「書く・話す」
「主題や内容に関するもの」	
・内容，主題をとらえる	・課題を見つけ材料を集める ・自分の立場，事実，意見を明確にする ・見方・考え方を広げる
「情報を読む力」	
論理や表現の工夫に関するもの	＝情報の個性
・語句の効果的な使い方 ・論理の展開の仕方 ・表現の仕方，文章の特徴 を読む	・効果的に伝わる表現の工夫 ・適切な論理の構成 ・説得力のある書き方 を考えて書く
「深化・拡大につながるもの」	
・目的をもって様々な文章を読み，情報を集める→自分の表現に役立てる，意見をもつ	・お互いに読み合い，表現に役立てる

Ⅲ．研究の方向性

中学校国語科の観点は，４観点から５観点に改められた。社会生活の中で必要な言語能力としての「伝え合う力」を高めることが目標として位置づけられている。その主旨をふまえれば，「知識・理解」に偏らず，５観点をさまざまな場面・方法で評価することが望まれる。また「目標に準拠した評価」として，目標の設定はもちろん，生徒一人一人の基礎・基本の習得状況を把握した上で，目標への達成状況の質的・量的な判断をどのようにするべきか考えなければならない。また，評価の材料をどう収集するのか，それぞれの観点を評価するためにはどのような方法が適切であるのか，取り組むべき課題は多岐にわたる。

「中学校学習指導要領　総則編」では，「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに，指導の過程や成果を評価し，指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。」と述べられている。つまり，「目標に準拠した評価」には，生徒一人一人がもつよい点や可能性など多様な側面，進歩の様子などを把握する個人内評価の視点が大切であり，成果としての評価のみではなく，評価が生徒の次への学習に生きていくような形成的評価が必要となる。

また，国立教育政策研究所の報告「総説　研究開発の経緯」の中では，「①自ら学ぶ意欲や思考力，判断力，表現力などを含めて児童生徒の学習状況を適切に評価できるようにする。②指導に生かす評価を充実させる。③過大な負担とならず，評価の改善に生かすことができるようにする。④学校における評価の研究や実践の研究を生かす。⑤保護者や児童生徒にとっても理解しやすい表現にする。」の５点が留意した点として示されている。

以上のことから，

○「知識・理解」に偏らない5観点の評価（それぞれの観点に沿った多様な評価方法を探ること）
○ 学力・学習意欲の向上につながるような評価（指導過程における形成的評価の方法を探ること）
○ 生徒にとって理解しやすい評価（客観性，妥当性のある評価の方法を探ること）
の3点を考慮した評価について研究を進めていく必要があると考えた。

Ⅳ．今年度の計画及び実践について

具体的な実践にあたっては，まず学習指導要領の目標と国立教育政策研究所の「評価の観点の趣旨と規準例」を参照し，各単元の評価規準を作成した。実践においては各単元の指導計画とともに，それぞれの指導場面における評価基準，評価方法を検討しながら取り組む必要がある。そのような実践を積み重ねた上で，各単元・学期末などの総括的な評価を行うことが必要である。

1　年間指導計画における各単元の評価規準の作成

どのような評価規準を設定し評価していくのか。まずは各単元ごとの中心的な学習内容とその評価規準，5観点の中でどの観点が中心となるのか，また「情報を読む力」をどの場面で評価できる可能性があるかも含めて，年間指導計画を作成した。この年間指導計画を基本として，さらに各単元・各時間ごとに具体的な指導目標に沿った評価基準を明らかにするとともに，生徒たちに目標として提示できるよう取り組む必要があると考える。表2は第3学年における年間指導計画及び評価規準表である。

2　評価の材料

5観点を評価するためには，どのような場面でどのような方法を用いればよいのか。各観点の評価場面を設定すると同時に，多様な評価方法が必要となる。観点と，評価の材料，評価場面の関わりを表3のように考えた。また，具体的な評価基準が設定できること（しやすいこと）と，評価の作業で指導に困難が生じないことについても考慮する必要がある。今後も検討が必要であるが，下線を引いた部分を中心に評価することが適切であると考えた。

3　評価基準

観点別のＡＢＣの評価基準をどのように設定するのか。Ａ「十分満足できる」Ｂ「おおむね満足できる」Ｃ「努力を要する」の判断の基準を明確にする必要がある。具体的には，各単元・授業の指導内容に応じて考えていく必要があるが，特にＡとＢの判断が極めて難しいことが予想される。「十分満足できる」とはどういう状況をいうのか。それぞれの観点別に「十分満足できる姿」を期待する像としてもっておく必要があると考えた。表4は各観点における「十分満足できる姿」として考えたものである。特に下線を引いたような姿が見られた場合，Ａ「十分満足できる姿」として評価できるのではないかと考えた。

表２　第３学年年間指導計画及び評価基準表（観点の◎は「情報を読む力」に関連の深いもの）

月	単元	教材	授業内容	観点 関心	話す	書く	読む	知識	評価規準
4	言葉とわたしたち	オリエンテーション	学習，授業評価について学ぶ。	○					今後の学習に対して意欲を高めることができる。
		詩が生まれるとき	文章を読み，身のまわりのこだわりについて考える。	○		◎			身近な言葉に対するこだわりに気づくとともに，それに対する自分の考えをまとめることができる。
		日本語は乱れているか	文章を読み，身のまわりの若者言葉について考える。	○		◎			若者言葉の特徴について考え，自分の意見をもつことができる。
5			報告書を書くシンポジウムを開く	○ ○	◎	◎			自分なりに課題を設定し，必要な調査を行い，報告書をまとめることができる。シンポジウムに積極的に参加し，他者の意見から学ぶことができる。
	書くことの学習１		問題意識をもって意見文を書く。	○		◎			「意見」「根拠」「予想される反論」をふまえて，問題意識をもって意見文を書くことができる。
	漢字の学習１		形に着目して漢字を考える。	○				○	それぞれの漢字の読み方や意味などを確認している。
	古典を味わう	君待つと	三大和歌集の歌を読み味わう。	○		◎	◎	○	古典の和歌を読み味わい，一つを取り上げ鑑賞文をまとめることができる。
6		夏草	奥の細道を読み味わう。	○			◎		芭蕉の心情や描写を読みとるとともに，古典のリズムに親しむ。
		項羽	漢文に慣れ親しむ。	○			○	○	漢文のリズムに親しむとともに，漢文特有の表現を用いることができる。
	言葉の学習１		敬語について学ぶ。	○				○	尊敬語，謙譲語，丁寧語の働きや使い方を理解することができる。
	漢字の学習２		漢字の音訓について学ぶ。	○				○	それぞれの漢字の読み方や意味などを確認し身につける。
7	文法１		言葉の意味と文法の関わり。	○				○	文法と意味の関係について理解することができる。
	本の世界を広げよう	握手	感想を交流する。	○		◎	◎		主題を捉え，感想をまとめることができる。また，他の人の感想に対して，その良さを認めたり，アドバイスを返すことができる。
		蝉しぐれ	感想を交流する。	○		◎	◎		主題を捉え，感想をまとめることができる。また，他の人の感想に対して，その良さを認めたり，アドバイスを返すことができる。
9	情報社会を見つめる	マスメディアを通した現実世界	筆者の主張をとらえ，自分なりの評価をもつ。	○			◎		筆者の主張とその論理や表現の工夫について，捉えることができる。
		パソコン通信というコミュニケーション	筆者の主張をとらえ，自分なりの評価をもつ。	○		◎	◎		筆者の主張に関わって，「パソコン通信」に対する，自分なりの評価をまとめることができる。
		メディアとの関わりを見直そう	立場を決めて討論する。	○	◎				自分の立場を明確にし，積極的に討論に参加することができる。
		わたしたちの未来を考えよう	構成を工夫して意見文を書く。	○		◎			書くべき材料を整理し，構成を工夫して書くことができる。
	文法２		表現の視点	○				○	「受け身の表現」や「格助詞の働き」による文意の違いを理解することができる。
10	漢字の学習３		漢字の意味	○				○	それぞれの漢字の読み方や意味などを確認している。
	書くことの学習２		説得力のある文章の書き方	○		◎			構成案をつくり，説得力のある文章をつくることができる。
	状況に生きる	故郷	表現を味わい主題を捉える。	○		◎	◎		表現の工夫について，気づき考えることができる。主題を捉え，それに対する自分の感想をまとめることができる。
		二つの悲しみ	表現を味わい主題を捉える。	○		◎	◎		表現の工夫について，気づき考えることができる。主題を捉え，それに対する自分の感想をまとめることができる。
11		お辞儀するひと	表現を味わい主題を捉える。	○		◎	◎		表現の工夫について，気づき考えることができる。主題を捉え，それに対する自分の感想をまとめることができる。
	言葉の学習２		語句の組み立て	○				○	漢語，和語，複合語，慣用句がどのようなものか，説明ができる。
	漢字の学習４		身のまわりの漢字・語句	○				○	それぞれの漢字の読み方や意味などを確認している。
	本の世界を広げよう	宇宙を見渡す日	感想を交流する。	○		◎	◎		主題を捉え，感想をまとめることができる。また，他の人の感想に対して，その良さを認めたり，アドバイスを返すことができる。
12	言葉の学習３		日本語の特徴	○				○	日本語の特徴について考えることができる。
	書くことの学習３		文章のいろいろ	○		◎		○	文章のいろいろを知り，広告文をつくることができる。
	文法３		コミュニケーション	○				○	応答，文末表現，イントネーションによる伝わり方の違いについて，考えることができる。
	漢字の学習５		総まとめ	○				○	それぞれの漢字の読み方や意味などを確認している。
1	未来に向かって	アラスカとの出会い	文章を読み，自分なりの考えをもつ。	○			◎		筆者が「アラスカとの出会い」で得たものについて捉えるとともに，自分の出会いについても振り返ることができる。
		温かいスープ	文章を読み，自分なりの考えをもつ。	○		◎	◎		主題を捉え，主題をふまえた自分なりの感想をまとめることができる。
		世界は一冊の本	作品を読み味わい，自分なりの考えをもつ。	○		◎	◎		主題を捉え，主題をふまえた自分なりの感想をまとめることができる。
2		私を束ねないで	作品を読み味わい，自分なりの考えをもつ。	○	◎		◎		主題を捉え，主題をふまえた自分なりの意見を発表する。
	人間と環境	物質の循環とごみ方程式，おーいでてこーい	テーマをとらえ，自分なりの評価をもつ。	○		◎	◎		筆者の工夫や表現の特徴に気づき，両者を比較しながら主体的に評価することができる。

表3　観点と評価の材料

観　　点	評価の材料		
	授業中に評価する	授業後に評価する	単元などの活動のまとめで評価する
①国語への関心・意欲・態度	観察（発言，様子）	ワークシート，自己・相互評価	自己・相互評価
②話す・聞く能力	観察（発表会・シンポジウムなどの活動の様子）（日常的な活動の様子）（発言）	ワークシート，自己・相互評価	ペーパーテスト，自己・相互評価
③書く能力			
④読む能力			
⑤言語についての知識・理解・技能	観察（活動の様子，発言）	ワークシート，自己・相互評価	ペーパーテスト，確認テスト

表4　観点と「十分満足できる姿」

観　　点	「十分満足できる姿」
①国語への関心・意欲・態度	言葉の担い手としての意識をもち，目標をもって取り組んでいる姿。積極的に学習に取り組んでいる，あるいはこつこつと継続的に向上しようと努力している姿。
②話す・聞く能力	効果的に伝わるように，内容や表現の方法を吟味し工夫して，話したり書いたりすることができる。読み手，聞き手として，表現の特徴・工夫に気づき，主体的に評価することができる。
③書く能力	
④読む能力	
⑤言語についての知識・理解・技能	「知識・理解・技能」を使いこなせるものとしてに身につけることができる。

4　具体的な評価の場面・方法

a　観察

授業中の生徒の発言，活動の様子を教師は常に観察し，評価している。しかし，それが客観性・妥当性をもっているかどうかが重要な視点であり，具体的な評価基準をもたなければならない。また，授業内で生徒にとっても教師にとっても大きな負担とならない評価の方法でなくてはならず，評価のための授業になることは避けなければならない。毎時間の授業において，一人の指導者が指導と並行しながら5観点全てについて観察することは到底不可能である。また，「国語への関心・意欲・態度」の1観点についても，例えば毎時間の全生徒の全発言を適切に評価することは難しい。ただし，生徒の活動の様子をつぶさに観察し適切な支援をすることは重要なことであり，例えば「国語への関心・意欲・態度」についてCの評価にあたる生徒に対し，机間指導などによってBとなるよう支援する必要があると考える。また，スピーチや話し合いなどの「話す能力」については，観察による評価が妥当であると考えた。

b　確認テスト

特に「言語についての知識・理解・技能」に関する漢字の学習や文法事項などについては，その定着度を測るため確認テストを行うこととする。Cのレベルの生徒には，再テストや個人指導を行うことで，Bに到達できることを目指す。

c　ワークシートの活用と自己評価

評価においてワークシートのもつ役割は大きく２点あると考えている。一つは，授業において生徒が自らの学習をまとめ，振り返ることができるよう導く役割，もう一つは，生徒の学習状況を教師が把握するための材料としての役割である。

前者においては，各時間の指導目標に沿った工夫が必要となる。５観点との関わりは単元やその時間の指導内容によって異なるが，その時間のねらいを明確にし生徒に示すと同時に，必要に応じて自己・相互評価も取り入れる必要があるだろう。また，「評価」の次への向上を促すという側面を考えれば，教師側の評価を加えて返すことも大切である。できれば，生徒の課題把握や次時への意欲につながるようなコメントを書き添えることが望ましいと考える。

また，後者の役割も大きい。「目標に準拠した評価」をするためには，生徒一人一人が学習目標に対してどの程度到達しているのか，すなわち個々の生徒の学習状況を把握することが必要である。そのため，毎時間の生徒の活動の記録は極めて重要な材料となる。ワークシートは各単元・授業の内容によって多様な形をとることになるが，その時間の目標に沿った観点・基準を明らかにしながら，評価を積み重ねていくことが可能であると考えた。

以上の点から，今年度は指導目標に沿ったワークシートを毎時間作成することとし，それを毎回提出させることとした。第３学年，最初の単元「言葉とわたしたち」の中の「報告書を書く」という学習の初めには図１のようなワークシートを用いた。あらかじめ評価の基準を生徒に示し，活動の最後にはその基準に従って自己評価をさせた。自己評価は次への生徒自身の活動へつなげることをねらいとした。また，活動を振り返り，言葉によってもまとめさせ，教師側がコメントをつけて返すようにした。

また，前期の中間の時期には，それまでの活動を振り返らせるため，図２のようなワークシートを用いた。活動内容を５観点に整理し，自己評価をさせた。また，生徒個々の努力や意欲を評価する材料として「自分ががんばった・成長した点」という項目を設けた。今後の自らの成長に向けて，課題を把握し方向性をもたせるために，「今後の課題」についてまとめさせた。

ここに例示したワークシートはどちらも，自己評価を中心としたワークシートであるが，毎時間のワークシートに自己評価を用いたわけではない。むしろ，学習内容の整理・まとめに重点をおき，自己評価や相互評価などは単元などの学習活動の節目，あるいは活動の内容・必要性に応じて用いることとした。評価によって学習内容が削られるようなことがあってはならないと考える。そのような毎時間のワークシートを指導内容に照らし合わせ，５観点に整理しＡＢＣの三段階を基本にして補助簿に整理した。しかし，毎時間のワークシートの作成と評価，特に一人一人の生徒にコメントを加えて返却することについては，かなりの労力を要する。

d　ペーパーテスト

ペーパーテストにおいては，「知識，理解，技能」に比重が偏りがちであるが，他の観点も可能な限り取り入れたいと考えた。ただし，「話す能力」についてはペーパーテストではなく授業の中で評価することが妥当であると考えている。各設問の配点を問いとともに明示し，また各自の観点ごと

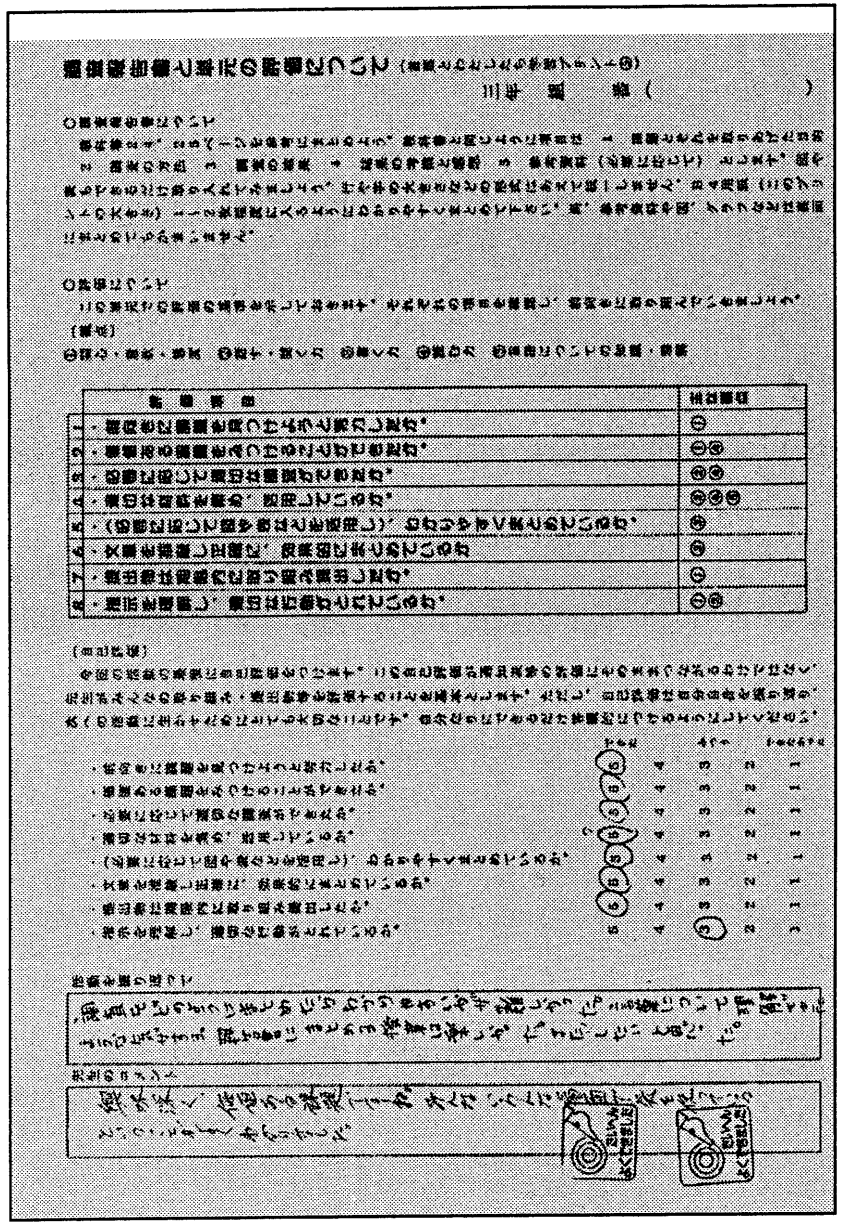


図1　ワークシート

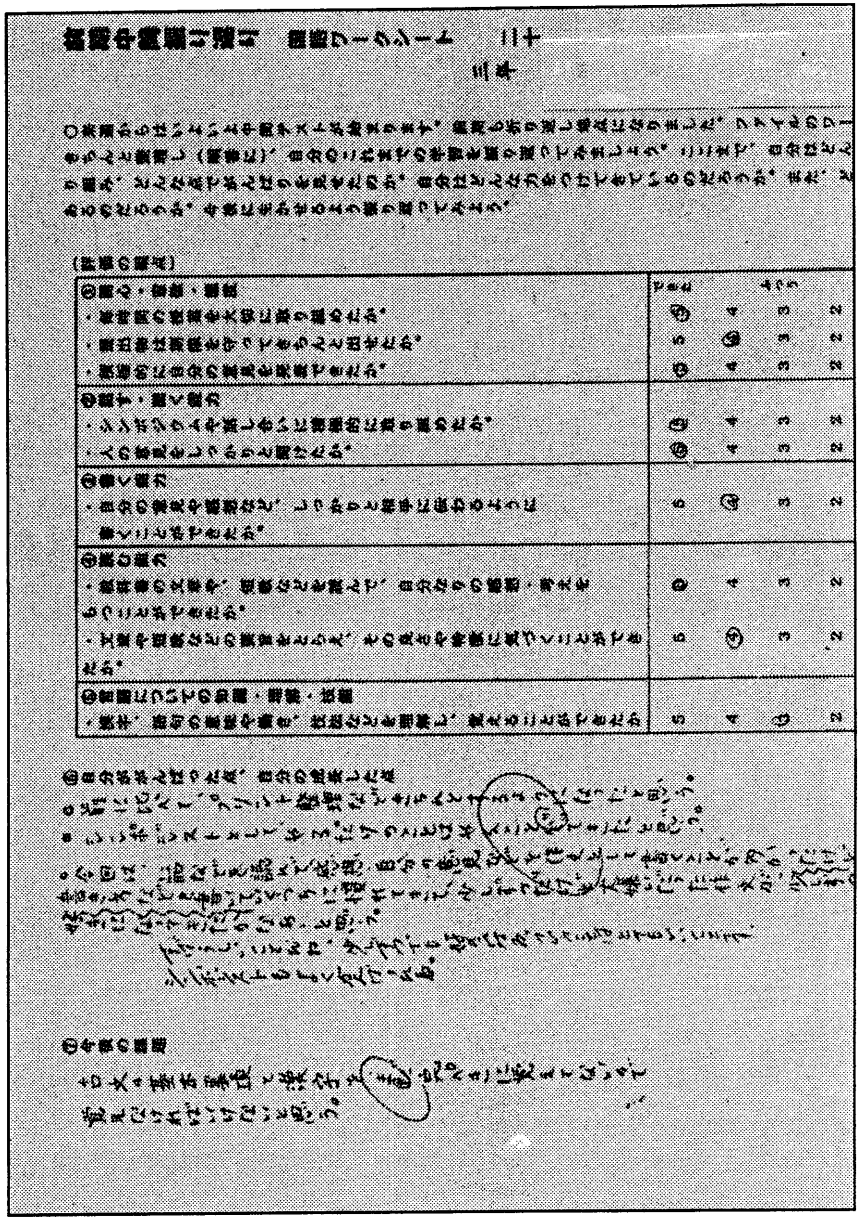


図2　ワークシート

の得点も図３のような形で示すようにした。図４の問題では，授業の中の意見交流の場面を振り返らせることで「聞く能力」，「書く能力」を評価する問題として作成した。「１　話題を明確にしているか　２　価値ある内容を取り上げているか　３　自分の考えをしっかり述べられているか　４　原稿用紙の使い方は適切であるか　５　誤字・脱字はないか　６　語句の使い方・文のまとめ方は適切か」という６項目の評価基準を生徒に明示し，各項目を３段階で評価し，１点～３点×６項目の計18点満点で採点した。これまでの定期テストで出題してきた問題よりも配点も大きく，配慮が必要であったが，６項目全ての項目の点数をテストに明記し返却することで，採点に対しては生徒も納得できたようである。

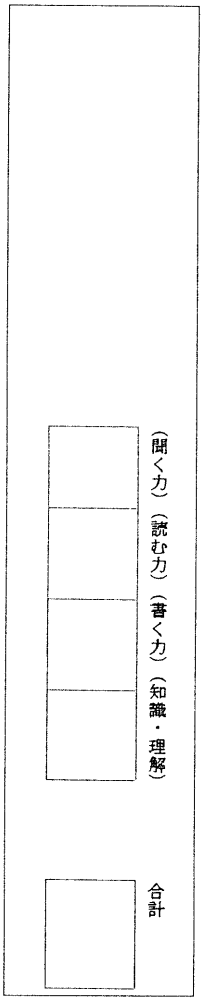
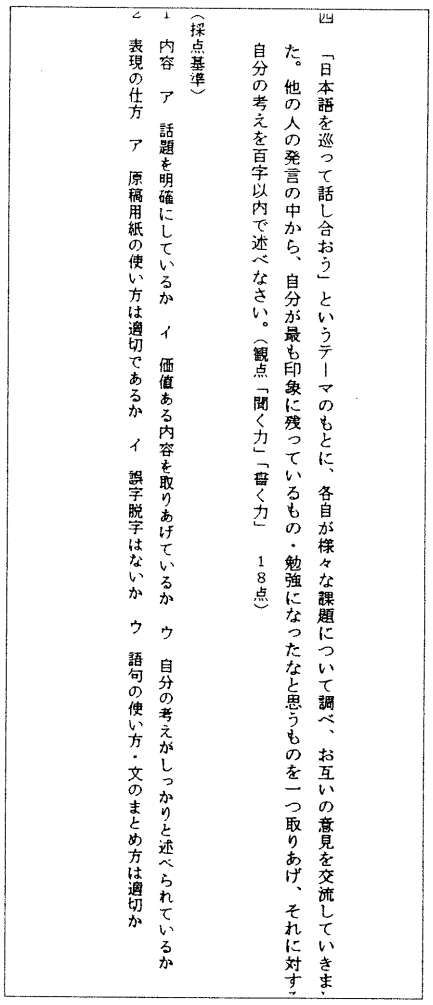


図３


四　「日本語を巡って話し合おう」というテーマのもとに、各自が様々な課題について調べ、お互いの意見を交流していきました。他の人の発言の中から、自分が最も印象に残っているもの・勉強になったなと思うものを一つ取りあげ、それに対する自分の考えを百字以内で述べなさい。（観点「聞く力」「書く力」　１８点）

（採点基準）

１　内容　ア　話題を明確にしているか　イ　価値ある内容を取りあげているか　ウ　自分の考えがしっかりと述べられているか

２　表現の仕方　ア　原稿用紙の使い方は適切であるか　イ　誤字脱字はないか　ウ　語句の使い方・文のまとめ方は適切か

図４

学期末のペーパーテストであり，ＡＢＣではなく点数として評価した。また，各項目を「到達してほしい基準」として考え，問題点があれば減点していく方法をとった。実際の生徒の答案の中から，２例をあげる。解答欄は25字×８行の二百字である。（生徒の文章は原文通り，ただし誤字は訂正しているがその箇所には□を付した。採点上「不十分である」と判断した部分を下線で示した。）

（生徒Ａ）私は「漢字」についての発表が印象的でした。私は，漢字が苦手なので「漢字なんかなくなればいい」と思うことがあります。しかも，メールをする時は変換キーを押すだけで漢字に変わるし，今からは覚えていなくても平気だと思いました。しかし，目上の人への手紙や書類などでは漢字の方がしまって見えます。本を読む時全部ひらがなでは読みにくいです。やはり私は漢字はしっかり覚えて，読めた方が絶対良いと思いました。

○１，２については妥当であると判断した。３については，「やはり私は漢字は」とあるが，なぜそう考えたのか，二百字以内という条件はあるが根拠が乏しい。したがって２点とした。４は問題なしとした。５は誤字があるので２点。６については，「思いました」は「思っていました」とすべき所。２点として採点した

（生徒Ｂ）僕が一番印象に残っているものは，○○さんが調べた敬語に対してみんなはどういった意識を持っているかというものである。僕自身は目上の人に敬語を使うのは当たり前だと思ってるし，敬語を使わない後はいにはたまにムカッとくることがある。○○さんが調べた結果ではあ

まり敬語を使っている人は少なく，後はいが敬語を使わなくてムカッと来た人はけっこう多かった，僕の思いとしては，尊敬の気持ちぐらいは持っていただきたい。

○1，2は妥当。3については「思い」であって「考え」というところまでは至っていないと判断し，2点とした。4は「○○さんが～持っているか」の部分には「」が必要であるので2点。5は，「。」とすべきところを「,」とあるので2点とした。6は「あまり」と「少ない」の使い方，「いただきたい」の使い方が不適切であると考え1点とした。

以上のような評価の仕方で，1～3の項目については「聞く能力」と「書く能力」の両方に関わる材料として，また，4～6の項目については，「知識・理解・技能」の評価の材料として補助簿に整理した。実際の答案には，赤ペンで下線を引き簡単な言葉や「×」などの記号を加えた。

ペーパーテストという形式で，時間・字数の制限があり，生徒には困難を感じたものもあったのではないかと考えている。また，当然ではあるがテスト中つまり活動中の支援は一切行えない。このような活動は通常の授業の中でも実践可能なものではある。しかしながら，それまでの学習に沿った内容をペーパーテストという形式で問うことについては，生徒の到達状況を教師が明確に評価するという点で意味があるのではないかと考えている。ただ，その評価に妥当性をもたせる，つまりは基準を明確にすることが重要であると考える。今後も，5観点を評価する上でどのような出題が可能であり有効であるか，検討していく必要があると考えている。

e　前後期中間・期末評価確認票

観点別の総括的な評価をする前に，学習内容ごとの教師の評価を一覧表にして配布した。生徒が自らの活動を振り返ること・到達度を知ることをねらいとした。具体的には，ワークシートの評価，ペーパーテストや確認テストによる評価，シンポジウムなどの観察による評価，課題の提出状況と評価などをまとめた資料を前期中間・期末それぞれの時期に配布した。生徒が自らの取り組みを総括的に振り返る材料の一つになったと考えている。各学習ごとの評価については，様々な形で生徒に返してはいるが，学期末などに総合的に振り返らせることで，自らの努力や課題を確認することができ，評価に妥当性をもたせるという点で意味があったと考えている。

5　具体的授業実践

(1)題材名「シンポジウムを開く」

(2)指導目標

・自分の調べたこと・考えたことを，聞き手を意識してわかりやすく効果的に伝える能力を育てる。

・お互いの調べたこと・考えたことを交流し合う中で，見方・考え方を広げることができるようにする。

・シンポジウムの進め方，発表・発言の仕方などの話し合いのルールや態度について学ばせる。

(3)指導計画

第一・二時　報告書をもとに，発表メモをまとめる。

第三時　　発表の練習に取り組み，互いに聞き合いアドバイスを交換する。

第四時　　シンポジウムを行い，意見交流をする。

表5　評価計画

時	おおむね満足できる状況（B）	観点	評価方法	○Aと判断される生徒の具体的な姿の例 ●Cと判断される生徒への具体的な指導例
1	・報告書をもとに発表メモをまとめることができる。	③	ワークシート	○「動機・意見」「根拠・事例」を明確にして，まとめることができる。 ●報告書の「動機・意見」「根拠・事例」をもう一度，確認させる。
2	・聞き手を意識したわかりやすい発表となるよう，発表メモをまとめることができる。	③	ワークシート（図5）	○グラフにまとめたり，クイズを作ったりするなど，聞き手にわかりやすく伝える工夫をしている。 ●発表者メモの具体例（ワークシート）を参考にさせる。
3	・発表の練習に取り組み，他者からアドバイスをもらう。	① ②	ワークシート	○二人以上の友達に聞いてもらい，アドバイスを生かそうとしている。●友達の発表練習を参考にさせる。
4	・シンポジストとして，わかりやすく自分の意見を発表できる。・発表者の意見をしっかりと聞き，自分なりの感想をもつことができる。	① ②	観察，ワークシート（図6）	○聞き手を意識して，効果的に伝えようとしている。 ●準備の際のチェック項目を確認させる。 ○発表者の意見を聞き，印象に残ったこと・疑問などをメモとして記録することができる。積極的に質問や意見を出すことができる。 ●必要に応じて，机間指導・個人指導を行う。

（観点①国語への関心・意欲・態度②話す・聞く能力③書く能力④読む能力⑤言語についての知識・理解・技能）

(4)指導の実際と評価について

準備の段階では，各自の作った発表メモをもとに練習をさせた。各自の練習の後，他の人に聞いてもらいアドバイスをもらう活動を取り入れた。生徒は，互いに時間を計り合いながら発表，アドバイスの交流を行った。ワークシートには，アドバイスを書き込む欄を設け，話すだけではなく，書くことでアドバイスが残るようにした。また，授業のまとめとして自分と他者の練習についての感想をまとめさせた。そのような活動の様子と，ワークシートのアドバイスの記入状況，感想によって評価した。

シンポジウムの場面では，シンポジスト以外の生徒には記録メモを取らせ，発表者への質問・意見の時間を各発表ごとに設けた。シンポジストの発表の評価は観察によって行い，他の生徒についてはワークシートの記入内容と質問・意見などの参加態度によって評価した。また，授業の最後にはシンポジスト，参会者それぞれの立場で自己評価をさせた。

V。おわりに

試行錯誤を重ねながら，評価について取り組んできた。目指したのは先に述べたように，

1　「知識・理解」に偏らない5観点の評価（それぞれの観点に沿った多様な評価方法を探ること）2　学力・学習意欲の向上につながるような評価（指導過程における形成的評価の方法を探ること）3　生徒にとって理解しやすい評価（客観性，妥当性のある評価の方法を探ること）の3点であった。

1については，ワークシート，観察，自己・相互評価，ペーパーテストの改善に取り組んだ。評価場面を計画・設定し，学習目標・観点に沿った多様な方法で評価することが望ましいと考える。「知識・理

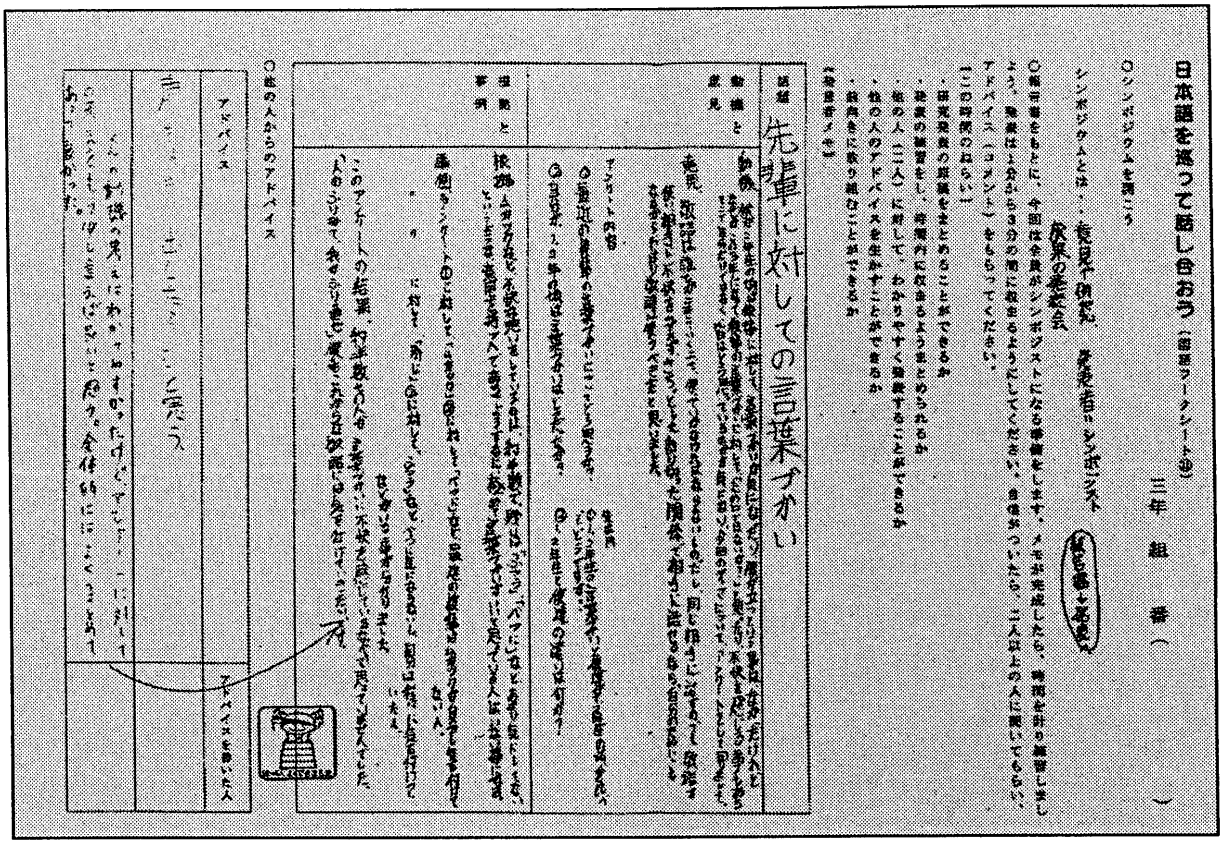


図５　ワークシートの例

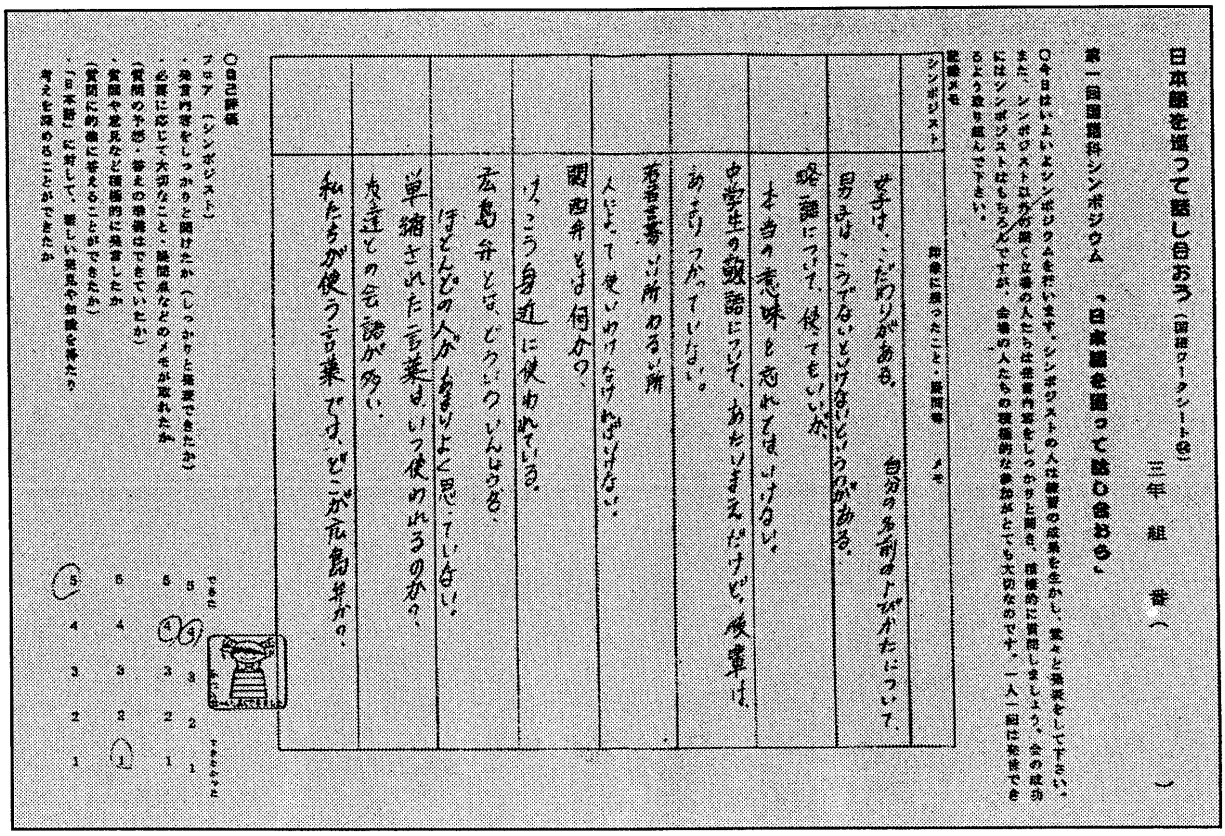


図６　ワークシートの例

解・技能」に偏らない評価は，国語科に求められている「表現」「伝え合う力」を育てる意味でも，本校が目指す「情報化社会を主体的に生きていく力」をつけていく意味でも，極めて重要な意味をもつと考える。しかしながら，特に「観察」による評価については，十分な研究・実践を行うことができなかった。今後の課題であると考えている。

2については，一つの方法として自己評価や相互評価があげられる。自己の成長や課題が見えるような評価が必要である。各単元の活動の中で，自己を見つめ，他者の評価を知り，また自らを振り返ることのできる評価であることが重要であると考える。教師の評価をどう生徒に返すことができるか，その方法についても研究が必要であると感じている。

3については，ペーパーテストの改善や確認票の配布を行った。また，授業においては，指導目標に沿って評価項目や学習のねらいを明確にし，十分生徒に理解させてから学習に入ることも重要であると考える。

「目標に準拠した評価」は，これまでも観点別の評価として実践してきたものである。しかしながら，自らを振り返ったとき評価が十分に機能していたとは言い難い。これまで実践してきた評価をより計画的に精緻に行うことに取り組んできたのが今年度の実践でもある。計画的で精緻な評価が生徒の力の育成や教師の指導の改善につながることは確かである。しかし，精緻になりすぎて負担が過大になることは，本来の教育の目標達成の障害にもなると考える。簡潔でなおかつ有効な評価のあり方を今後も検討していく必要がある。これまでの実践が適切であるかどうかも含めて，今後引き続き評価のあり方を検討していきたい。

引用・参考文献

文部省．中学校学習指導要領．解説―国語編―．1999.

文部省．中学校学習指導要領．解説―総則編―．1999.

北尾倫彦・金子　守編．観点別学習状況の新評価基準表．2002.

国立教育政策研究所．「評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料（中学校）」―評価規準，評価方法等の研究開発（報告）「国語　評価の観点の趣旨と基準例」「総説　内容のまとまりごとの評価規準」

「総説　研究開発の経緯」．pp. 6 ～ 7 .2002.

三宅将巳「情報化社会を生きる力を培う国語科授業の創造」．広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」．第34集．p.21～32.2002.

杉野清隆「国語科における主題単元の構想」．広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」．第34集．p.9～19.2002.